▼想ひ出す父の言葉

水野仙子

私は露西亞に行つて見たいと思ひます。露西亞が好きですから。その土地も、人も、風俗も、みんな好きです。私の貧しい讀書によつて養はれた想像が、躊躇なくさう答へます。誰に會ひたいとも思ひません。たゞ親切な宿のおかみさんでもあつたら結構です。さういふ人に世話を燒いて貰つて、暢氣に、人と自然とを見て歩きたいと思ひます。長く居ようとは思ひません。尤も日本に歸るのが厭なほど其處が氣に入つたら仕方ありませんが。露西亞でも私は殊に田舍を好きます。

――かういふことを人に聞かれる度びに、かう答へるたびに、私はいつも、死んだ父が私が國を出る時、二つ三つの心得を言つて呉れたうちに露探と耶蘇にだけはなつてくれるなと言つたのを思ひ出します。

底本：「新潮」大正二（1913）年五月號
入力：小林　徹
公開：令和四年二月二十日

水野仙子「作品年譜」に戻る